

筆者タッド・ラーソン氏（42歳）は歴史学の大学教授で世界最大のバンブーロッド・コミュニティ「The Classic Fly Rod Forum」管理人。本稿は本誌連載のための書き下ろしである。（編）

これまでわたしたちは本連載において、バンブーロッドの限界に挑む革新的な北米のバンブーロッド・ビルダーたちを紹介してきた。今回もバンブーロッド・ビルディングへ新しい変革をもたらそうとする、才能あふれるビルダーを紹介できる機会に恵まれた。

そのビルダーはヨーロッパの中心部、正確に言うとスイスに住んでいる。彼の名はカート・ザンブラン。驚くほど才能豊かな彼の画期的なロッドデザインは、過去20年のバンブーロッドの歴史を遡っても、他に類を見ない。

多くの釣り人がザンブランのロッドを激賞する。とりわけザンブラン・ロッドのオーナーは。

生活の糧としての魚釣り

これまで紹介してきた個人的なビルダーと同様、ザンブランの経歴もまた興味深い。1963年にスイスのマイリンゲンに生まれたザンブランは、歩き始めたときにはすでに釣りをしていた。彼は思い出すように言った。

「3歳になるとすぐ、父は私を釣りに連れていくようになった。そのおかげで私の心には釣りが深く刻まれたんだ。」

当時の釣りは生活の糧としての釣りであった。規定サイズを下回る魚をリリースすることもほとんどなかった。



大きな魚（ヨーロピアン・レイクトラウト）を手にするザンブラン

何より釣果が最優先されたからだ。「当然、エサは生き餌さ。ときどきスピナーも併用した。夏から秋にかけては、エサはほとんどバッター一辺倒だった。」

10代のザンブランが釣り上げた魚は大半がブラウントラウトだった。それらは地元マイリンゲンにあるホテルやレストランの食卓に上った。そしてその魚たちが彼の自宅の家計を支えていた。

21歳で初めてのフライを

多くのエサ釣り師がそうであるように、ザンブランも後年になってフライフィッシングに傾倒する。若いころからフライフィッシングに興味を抱いていたものの、周りにフライフィッシングをする人がいなかった。そのため、21歳になる1984年までフライ

フィッシングに触れる機会を持たなかった。

その前年、彼の頭を占めていたのはこんな思いだ。「食べもしないのに魚を殺すことは果たしてフェアと言えるのだろうか。彼は後ろめたさを強く感じた。そのような釣りは金輪際しないことを誓った。」

翌年、身近でフライフィッシング教室が開かれることを耳にすると、ザンブランは即座に参加した。初めてフライフィッシングを学んだその時以来、ザンブランとフライフィッシングとは切っても切れない仲になった。「道徳的に正しく、環境にやさしい釣りこそ、フライフィッシングだ。ザンブランはそう感じた。」

ザンブランは初めて経験したフライフィッシングの思い出を次のように語ってくれた。

「水辺に立って、自分にとって初めての釣りーフライフィッシングをした。すると自分が再び釣りの初心者になったことに気づいたんだ。探究心がわき起り、あらゆることに目を奪われた。全く新しい世界が目の前に広がると、釣果なんてものはどうでもよくなった。自分を水辺へと駆り出す動機は、釣果から美しいフライキャストイングとフライの完璧なブレゼンテーションへとかわった。釣果を追う釣りには興味を失せたけど、フライフィッシングを知ったもう一度釣りがたまたま楽しくなったんだ。」

「2000年のある日、バンブーロッド・ビルディング教室が開催されることを耳にした。すぐに申し込んで参加した。その1週間の経験が私をバンブーロッドの世界に引き入れたんだ。クラスは金曜の午後に終了するのだけど、教室で習ったことをすぐに使ってみたくて、翌土曜の朝には2本目のロッドに挑戦していた。バンブーロッド作りに対する情熱が呼び覚まされたんだらう。そのとき以来、現在までずっと何かに取りつかれたようにロッドを製

バックグラウンドは木工職人

ザンブランはこうして熱心なフライ・アングラーとなった。彼がバンブーロッド・メーカーとなるまでにはまだ長い道のりを要する。しかし実はすでに彼には、後にすばらしいビルダーに変貌するだけのバックグラウンドがあった。

カート・ザンブランは木工彫刻で有名な一族の出身であった。

「母親も子供向けの動物のおもちゃを彫っていた。親戚と一緒に仕事をしていたので、自分の手を使って何かを製作するのはごく自然なことだった。」

バンブーロッド・ビルディングは、木工彫刻ほどには伝統的な技術を必要としない。カート・ザンブランがバンブーロッドの製作にいいよ興味を持ったのは、20世紀が終わりを告げようとしているときだった。



Radical Bamboo Rod Builders ⑧

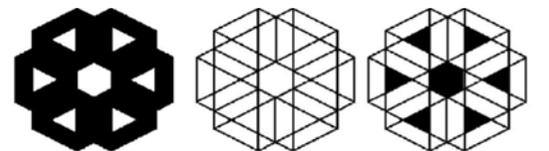
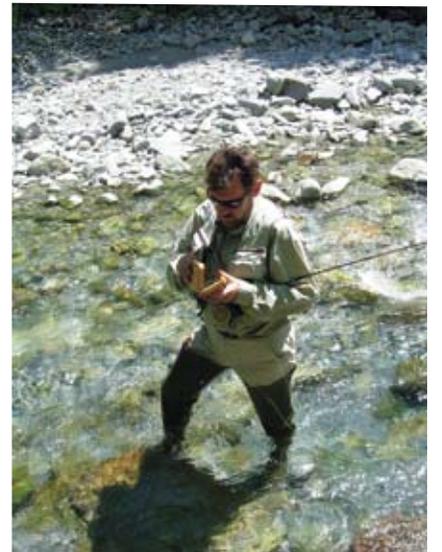
Kurt Zumbrunn

カート・ザンブラン

誠実でどん欲なスイスの天才職人

他のビルダーが自分のアイデアを使って評判を上げていると知った時、ザンブランは「少しニヤッとしたね。」
誰が何を、どう真似しようともかまわない。バンブーロッドの知られざる可能性の追求に忙しい彼にとって、些細なことを気にしている暇はない。

text Todd E. Arai Larson
タッド・ラーソン/シンシナティ州/ホワイトフィッシュ・プレス
translation 永野竜樹
ながのたつき/東京都



大写真は36本のストリップと7つのホロー部分からなる「ローズ」構造のロッド。上はその構造図。左は13ストリップ構造ブランクの断面と、シラカバの樹皮を巻いたザンブラン独自のグリップ